

光触媒研究会

1. はじめに

本研究会の遠祖は、研究会制度が開始された翌年の1988年から始まる「エレクトロキャタリシス研究会」である。1994年には、その後継研究会として「電子または光子がかかわる触媒研究会」が発足した。触媒反応のドライビングフォースとして外場を作用させるということを強調して命名されたものと思われる。「光触媒研究会」は、さらにその後継研究会として2004年に引き継がれたものである。また、当研究会発足のもう一つのきっかけは「光がかかわる触媒化学シンポジウム」の開催である。同シンポジウムは「光がかかわる触媒化学の小討論会（触媒学会主催，1979-81年）」として始まり第1～3回「太陽光エネルギー変換にかかわる触媒化学シンポジウム（理研，1982-84年）」を経て1985年から現在のタイトルに至っている。連綿と続くこの研究分野に新しい風を吹き込んできた日本の触媒学会を中心とする研究者の当該分野への貢献は極めて大きい。可視光水分解をはじめとしたこの研究分野においては、日本が世界をリードしている。

2. 今年度の活動内容と展望（敬称略）

今年度も、「光がかかわる触媒化学シンポジウム」を東京において開催した。また、例年どおり触媒討論会へのセッション参加の事業を展開した。

第35回「光がかかわる触媒化学シンポジウム」を6月10日、東京工業大学・蔵前会館にて開催した。一昨年度から設置し、好評を期したポスターセッションを引き続きもうけ、ポスター賞（上位1割程度）も授与した。本シンポジウムは、1件の総合講演、11件の一般講演、27件のポスター発表で構成された。本シンポジウムでは、実際的成果（活性向上、新反応や新触媒の発見）の報告に加えて、学術的、基礎的な研究発表もあり、極めて充実した議論が展開された。さらに、新設されたポスターセッションでは、若手研究者とシニア研究者との間で活発な討論が行なわれた。この分野が大きくはばたくことを予感させるものであった。参加者は90名であった。今回、特に企業からの参加者が15名と昨年よりやや減少した。

岩手大学で行われた第118回触媒討論会に光触媒セッションとして企画した。一般講演としては、57件の口頭発表とアドバンストユースを含むポスター発表が40件があった。これは、2011年度から引き続き各セッション中でもっとも多い発表件数であった。特別講演として、石谷 治先生（東工大）に「半導体光触媒と金属錯体光触媒の創発的融合」をお願いした。依頼講演として、天野史章先生（北九州市立大学）に「交流インピーダンス法による酸化タングステン光電極反応の解析」をお願いした。いずれの講演も立ち見が出るなどの盛況を博した。

3. 世話人代表

古南 博

〒577-8502 大阪府東大阪市小若江3-4-1 近畿大学理工学部 総合理工学研究科

E-mail: hiro@apch.kindai.ac.jp TEL: 06-6721-2332

光触媒研究会HP: <http://www.shokubai.org/com/photo/>